5 月 20 日(月)、たかまつ讃岐てらす財団「子ども若者の体験や学びの機会を支える助成」【学校対象】2023 年度報告会＆2024 年度説明会をオンラインで開催しました。

てらす財団にとって、設立初年度に実施した最初の助成プログラム。そして報告会も財団にとって初めてのことでしたが、20 名程の方にご参加いただき、とても充実した時間となりました。

2023 年度プロジェクト報告
＊発表者のお名前と所属は、助成採択時のものです

まずは昨年度助成事業の成果報告から。3 つのプロジェクトが実施されました。

1) 高松市立屋島西小学校「漫才ワークショップ in 屋島西小学校 ~おでかけよしもと放課後クラブ~」

トップバッターで報告いただいたのは、屋島西小学校教諭の坂井さん。
3 年生の児童が「福祉」について学ぶにあたり「みんなが幸せな屋島西町ってどんな町？」をこどもたちみんなで考えていきました。
そのなかでこどもたちから「元気・笑顔」というキーワードが出てきて、「それなら人を笑顔にできるお笑いがいい！」「プロの芸人さんに来てもらって、アドバイスしてもらいたい」となったのだそうです。こどもたち、すごい発想！

芸人さんへの謝礼をどうするかで壁にぶつかっていた時に SNS でこの助成を知り、応募していただきました。10 月に説明会を受けて申請が通り、12 月には漫才ワークショップの実施にこぎつけたそう。

ワークショップ当日は吉本興業から 2 名の芸人さんに来ていただき、こどもたちは練習の成果を見てもらったうえで、ジェスチャーや声の大きさなど具体的なアドバイスをもらうことができました。
自信をつけた子どもたちは、後日学んだことを活かしながらお年寄りの前で堂々と漫才を披露し、とても喜んでいただいたそうです。

「こどもたちのやりたい気持ちが出てきた時に、助成のおかげでその気持ちを活かすことができて、とてもありがたかったです」と笑顔の坂井さんでした。

2) 香川県立坂出高等学校「SBC 本島ビーチクリーンアップ」

続いては香川県立坂出高等学校前教諭の岡内さん。
以前からビーチクリーンアップの団体を生徒達と一緒に立ち上げ、これまでに計 14 回延べ 500 人に参加してもらって活動を実施してきた結果、活動していた海岸では海ごみがかなり減ってきていました。
そんなときある生徒から「沖にある島ではどうなっているんだろう？」という意見が出たのをきっかけに本島に行ってみると、そこでも海ごみがたくさん見つかり衝撃を受けたそうです。
さっそく本島でもクリーンアップを実施したいと考えたのですが、交通費など高校生には負担が難しく、それならと本助成に応募してくださいました。

本島での活動当日はたまたま同日に本島を訪れていた香川大学の学生さんも含め、20 名以上の参加者で海岸をクリーンアップし、80kg のゴミを回収。また、島民の方に島を案内していただき、生徒たちは島民の方との交流も経験しました。
活動後は島に興味を持つ生徒が増え、また本島でクリーンアップしたいという生徒さんも出てきたそうです。

「SBC は私（岡内さん）が個人で立ち上げた団体で、これまでは活動費を自腹で出していたので、助成はほんとうに助かりました。」と岡内さん。瀬戸内に住むひとりとして、これからはビーチクリーンアップで島嶼部を全制覇したい、と意気込みを語ってくださいました。

3) フレンドシップ実行委員会「フレンドシップ事業・虹の部屋こどもの居場所プロジェクト」

報告会のトリはフレンドシップ実行委員会の熊田さん。
教育支援センターが運営する新塩屋町「虹の部屋」は、学校に行けないこどもたちを対象に、小集団での体験活動を通して意欲やコミュニケーション能力を高め、社会に出ていく力を養うことを目的としています。

ただ、実際に通室しているのは対象となるこどもたちのうちほんの一部で、見学に来ても通ってもらえないことも多く、理由をこどもたちに聞いてみると、もともと小学校の建物を使っていることもあり「学校みたいでイヤだ」という意見があったそうです。
それなら、というわけで、地域の建築士さんに助言をいただきながら、こどもたちが落ち

着ける場所をみんなで作ることになりました。

　プロジェクトは、一級建築士の野上むつみさんを中心にこどもたちと関わりながら進めていきました。最初に居心地のよい場所にするためのアイデア出しをみんなで行い、それをもとにドームの骨組み(フラードーム)をみんなで協力して制作。そして、ドームに壁や窓を作って部屋にしていきました。

　できあがった自分たちの部屋にこどもたちは大喜び。普段なかなか通えなかった子が、ワークショップの３日間とも参加してくれた、ということもあったそうです。
　それまでは「虹の部屋」に来たこどもたちに「なにかさせなきゃ」という思いがあったという熊田先生。「部屋の中ではなにもしなくていいから嬉しい」というこどもたちの声が印象的だった、と話してくださいました。

トークセッション

　プロジェクト報告後、報告してくださったお三方にてらす財団の藤本理事が加わり、トークセッションを実施しました。

<こどもたちの「やりたい」を形にするうえで工夫した点はありますか？>
（坂井先生）私もお笑いが好きということもあり、楽しみながら対等に子どもの言葉を聞くことができました。
　そんなの無理に決まっている、という子はあまりいなかったですね。疲れていたり自分の調子が悪いと否定的な発言が出やすいので、私も気をつけています。

（熊田先生）野上さんに来てもらって空気がガラッと変わったのを覚えています。
それまで大人が正解を用意して、こどもをそれに向かわせようとするところがありましたが、野上さんは正解を用意せずに向き合ってくれたのが良かったですね。

（岡内さん）やりたいことがないという子が多くて、ネットで調べて終わらせる子が多いんです。でも自分自身が世の中に面白い人は多いぞ、と感じることが多かったので、それを子どもたちに話してみると、わりと手応えがあったんです。
　海ごみ問題から派生して自分で面白いことを見つけた子もいました。だから教員が率先して楽しむ、面白がることは大事だと思います。

（藤本理事）これまで大人はこどもたちに「諦めること」を教えてきたのではないでしょうか。

こどもたちが諦めずに体験を積み重ねるなかで、諦めない子どもが育つように思います。

<地域への愛着や地域との連携は深まりましたか？>
（坂井さん）登下校の途中で地域のご年配の方と会った時に「面白かったよ」と話しかけてもらったり、挨拶してもらえます。単に交流して終わり、といった決まり切った関わり方でなく、自然な流れ、自然な関わりの中で子どもたちも学べたことががよかったです。

（岡内さん）地域でこの人面白いな、という人をどんどん生徒に紹介しています。学校の教員が与える影響より、地域の大人が与える影響はずっと大きなものがあると感じますね。
地域の人に学校で話してもらうのも刺激になります。

(熊田さん）野上さんもそうですが、当日取材に来てくれた記者さんからもこどもたちは刺激を受けていました。面白い大人に会うことで、こどもたちは未来に希望を持てるんです。

＜学校の外の大人は、こどもたちとどう関わっていけばよいか？＞
（坂井さん）今回、吉本興業からも学校と一緒になにかやりたいと言ってくださったんですが、実際に学校とどう関わったらいいか迷っているようでした。それが、助成を受けることで「助成プログラムとして実施する」という形を取ることができ、お互いに歩み寄りやすくなったというのはありましたね。

（岡内さん）いつものビーチクリーンと違い、助成プログラムとしてお金をもらって事業を実施したことで、「自分たちのやっていることが認められた」と、子どもたちのモチベーションがすごく上がったんです。
また、校長先生にも関心を持ってもらって、ビーチクリーンの活動を知ってもらうきっかけにもなりました。

（熊田さん）財団が繋ぎ役として、お金だけでなく講師とのご縁を繋いでくださったのはとてもありがたかったです。

（藤本理事）シビックプライドという言葉がよく言われますが、それは「瀬戸内の美しい景色を誇りに思う」というようなことだけでなく、人との繋がりがとても大事だと思います。
てらす財団が資金の提供に留まらず、人と人との繋ぎ役になっているというのは大変意義があると考えています。

参加者のみなさんからも活発なコメントをいただき、盛況のうちに報告＆トークセッショ

ンを終えることができました。
「広島県で高校生が地域交流活動としてスマホ・パソコン教室の出前ボランティアをしていて好評ですよ」など興味深いコメントもあり、貴重な情報共有の場にもなったのではと思います。

「子ども若者の体験や学びの機会を支える助成」【学校対象】は 2024 年度も実施します。ことしは助成総額が 80 万円、1 団体の上限が 10 万円と昨年度よりパワーアップしていますので、ぜひたくさんの方に申請していただければと思います。
応募お待ちしております！